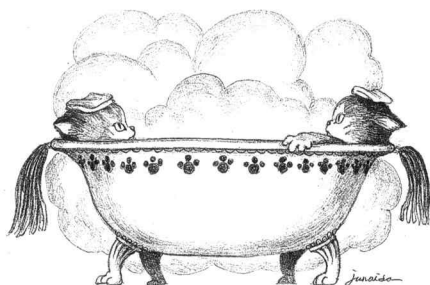


朝日 歌壇 俳壇



＜日曜日のブローチ 32＞ junaida

短歌時評 現実を暗喩する言葉

山崎 聡子

世界で起る戦争・紛争について、歌人は「見る者」である自分を詠んできたように思う。「テレビを見て書いたような」という批判が成り立つ一方、どの位相から詠むか、様々な試みがなされてきた。そして現在、ウクライナやガザの惨禍を面前にし、バックラッシュや排外主義が雪崩れ込むなかで、これらを自分の内面と結びつけて扱う短歌が生まれている。オッペンハイマーの気持ちは鮮明にわかるに決まっている、歌人だから

世界で起る戦争・紛争について、歌人は「見る者」である自分を詠んできたように思う。「テレビを見て書いたような」という批判が成り立つ一方、どの位相から詠むか、様々な試みがなされてきた。そして現在、ウクライナやガザの惨禍を面前にし、バックラッシュや排外主義が雪崩れ込むなかで、これらを自分の内面と結びつけて扱う短歌が生まれている。オッペンハイマーの気持ちは鮮明にわかるに決まっている、歌人だから

れ、信仰心が容易に暴力に転化する可能性を自覚的にみつめている。次の歌では、「ファンデーションを塗る」という規範に対する違和感、「戦争」という語の執拗な反復によって示される。もう顔がみずたまりだから照り輝るテレビは（映像の世紀）しか観ない目の奥に痛みはきざす目の奥の画面が死者に触れようとして 大森静佳／同大森の歌でも、20世紀の歴史を振り返る記録映像を背景に、繰り返されてきた人間の歴史が現実を侵食する。いずれも、私たちが暴力を駆動させる社会の一部であることを思い起こさせる。（歌人

第40回俳壇賞 福岡県春日市の馬場公江さん(60)の「ゆらゆら」(30句)に決まった。本阿弥書店の「俳壇」誌の新人賞にあたる。「角川 季語別俳句集成」春、夏、秋、冬、新年の5分冊で、合わせて約3500人の俳人の秀句6万6千句余を収録。松尾芭蕉の全句を収載。無季俳句と自由律俳句を「新年」の巻に収めた。(角川書店・2090～2640円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8861 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿でき

大串 章選

捨案山子神と呼ばれし事も有り (南房総市) 山根 徳一
天命を知る齢かな秋深む (高松市) 葛原 由起
雲流れビル谷間に秋思かな (東京都世田谷区) 須藤 渉一
恙なき日目をかきわて秋惜しむ (長野市) 縣 展子
折鶴の飛立ちさうな秋の空 (茅ヶ崎市) 浜本 文子
石庭に石の声して秋深し (高松市) 信里由美子
九十の壁越え鶴の声を聴く (新座市) 丸山 巖子
海見える古墳が二つ赤とんぼ (いわき市) 馬目 空
雨宿り無人駅舎に吊し柿 (習志野市) 村井 慎一
鰯雲卒寿の背筋伸ばしけり (下関市) 野崎 薫

【評】第1句。例えば『古事記』には「足は行かねども、辰に天の下の事を知れる神なり」とある。第2句。天命を知る齢「知命」は50歳の称。「秋深む」が効いている。第3句。空には雲が流れ、ビル街には人々の秋の物思いが籠っている。

高山れおな選

白鳥や絨毯のごと飛来せり (岩見沢市) 村岸 基量
帰る道いつこ福島秋深し (福島県伊達市) 佐藤 茂
俳諧は一系ならず紅葉山 (長崎市) 下道 信雄
気風ぬけ漁船黄金に耀けり (横浜市) 鈴木 正明
兵役のなき国に咲く血止草 (豊前市) 三原 逸郎
老大と日々大切に冬に入る (大阪市) 上西左大信
むくどりの騒ぎに似たりハロウィーン (新座市) 丸山 巖子
手袋を脱いで口火を切る会議 (富士市) 村松 敦規
あぜ道をまた歩けたよいのこつち (美作市) 駿河 亜希
位置につくりレの選手秋高し (横浜市) 斎藤すみれ

【評】村岸さん。白鳥の群は空飛ぶ絨毯！ イメージの鮮やかさと童心と。佐藤さん。芭蕉「空鳥はいづこ五月のぬかり道」を踏まえつつ福島の現在への思いを歌う。下道さん。内藤鶴雪「元日や一系の天子不二の山」を反転した批判精神の句。

小林 貴子選

何となく脱皮したよな爽やかさ (松戸市) 橘 玲子
里神楽蛇切りのおとの薬匂ふ (枚方市) 衛藤 聰一
海鼠なまめき人魚のさなきかもしれぬ (横須賀市) 渡辺伊世子
秋という秋が何日あったらう (つくば市) 小林 浦波
迎へたるばかりの秋を惜しみけり (今治市) 横田青天子
せつちかな大阪の街冬支度 (尼崎市) 小石 絹子
☆冬支度悲しみまでは扱わず (高松市) 樋口淳一郎
しなかつた話集めて落葉焚き (筑紫野市) 二宮 正博
長き夜や配置換へする心の荷 (東松山市) 鈴木 圭
献立の秋刀魚塩焼き骨抜きで (横浜市) 清野 賢一

【評】一句目、人間も蛇のように脱皮できたら、きっと爽やかだろう。二句目、薬の大蛇をスサノオが剣で退治する。神楽のすごい場面だ。三句目、海鼠がまさか人魚のさなぎとは、作者の想像力、恐るべし。四句目と五句目は秋の短さを嘆く。

長谷川 耀選

ながながと生きて眺むる冬の川 (名古屋市中区) 鈴木 修二
みちのくや狩るのも命がけ (北本市) 萩原 行博
冷まじや一喜一憂血圧に (長野県下諏訪町) 中村 久
目に見えぬ枯野が覆ふガザの街 (筑紫野市) 二宮 正博
☆冬支度悲しみまでは扱わず (高松市) 樋口淳一郎
ハッブルの覗く宇宙あり星月夜 (東村山市) 内海 亨
帰り花クルスを隠す耶蘇の寺 (さいたま市) 関 とし子
やがてゆくいづれひとりの芒原 (川崎市) 久保田秀司
太陽のごとき新米いだきぬ (長野市) 縣 展子
ひく力こらへる力大根引 (大津市) 中村 良一

【評】一席。人生の途上で見ている川。胸にずしりと。二席。例年になく熊の句あまた。みちのくに限らず。三席。時代、世間、家族との「間」をとるのが大事。俳句の「かるみ」の心でもある。十句目。力加減というもの。大根一本抜くにも。